

これからの世界・社会に立ち向かう
日本の夢（ビジョン）

第四期自啓共創塾

塾生・最終レポート
附・伴走者レポート

令和6年12月17日

一般社団法人

世界のための日本のこころセンター

原則 15 歳から 60 歳までの多世代で、また職業や属性も多岐にわたり、さらに居住場所も日本全国、海外に及ぶ 30 名強の塾生が集い、学び合った結果の、各人の最終レポートです。

塾生	年齢		所属	役職
1	23	男	一般社団法人	
2	36	男	論壇チャンネル	編集長兼営業部長
3	37	男	企業	浜松市在住
6	67	男	企業	人材開発トレーナー 京都市
7	55	女	地方公務員	別府市在住
8	22	男	大学生	4 年生
10	51	男	企業	ディレクター
13	30	女	企業	ディレクター
17	46	女	企業	グループリーダー
18	44	女	企業	
19	38	男	地方公務員	岐阜県在住
20	53	女	地方公務員	和歌山県在住
21	55	女	企業	オーストラリア在住
22	35	男	企業	
23	57	男	企業	
24	53	女	NPO 法人	
25	49	男	企業	執行役員 名古屋在住
27	46	女	無所属	
30	58	女	企業	部長
31	60	女	一般社団法人	伊東市在住
33	32	女	企業	
34	43	女	企業	社長

《塾生レポート》

1. 中嶋夏月

禅、神道、華道、積み重なった道がきっと僕の命を繋いでいる、紡いでいる。僕が生まれたことをこの世に性を受けたことを教えてくれる、日本に何か恩返しをしたい。この生まれた日本に。

僕は死ぬということをとっても大切にしています。人は、悲しいことに本当に大切なものは失って初めて気づくものです。親のありがたさ、健康、そして命。生の輝きは死の存在に依存すると思います。これまで剣道や禅などの日本の大切にしてきたものを学んできましたが、自分を忘れること、無我の境地、無慈悲の愛。この辺りに行き着くのではないのでしょうか？でも僕は、それは死を通して感じるものだと思っています。自分自身は存在しない。一生誰ともわかりあうことができない悲しい生命体であることを知る。生まれてほんの一瞬生きてそして死ぬ。確実に死ぬ。

それを知ると、ああ、欲って消えていくんですね。骨になるんですから。それが、自分を忘れさせ、無我になり、そしてこの世に何かを残したいという思いが無慈悲の愛を生み出す。

だから難しいことはしなくていいですよ。自分を忘れようと思ったら自然と瞑想をするし、森の中に入りに行くし、日本の培ったものに目をいく。それを逆にしているからおかしくなる。学ぼうという思いがすでに墮落している。いただいた命を使い切る。それぞれの使命に従って生きる。それだけでいいですよ。きっと。確かに、知識欲は強力ですよ。それ以外に性欲、睡眠欲、食欲、いろんな欲があります。それに従って生きることも大切です。でもきっとどっちでもいいんですよ。生きてもいいし死んでもいいし、頑張ってもいいし、墮落してもいいし、泣いてもいいし笑ってもいいし。

だって人生はここまでかというほど意味がないのですから。

2. 今西宏之

日本を伝承し、創造していくために

「世界のための日本のこころセンター」が主催されている「自啓共創塾」の講義に参加された方々は、立場や信条に差異はあるにせよ、日本の歴史・思想・文化・風土を重んじ、それらを学んだ上でこれからの日本と日本人の発展と隆盛に寄与したいと考えておられると私は解釈している。かくいう私自身もそうである。本稿では、「自啓共創塾」の授業のレポートという形を通じて、いかにしてこれからの時代に日本人が日本を伝承し、そして創造していくべきかを私なりの思想と方法論を持って叙述していきたい。

現在、いわゆる「伝統工芸」を生業としている職人が自らの工房や屋号、あるいは商品の名称に平然とアルファベットを用いている場合が少なくない。また、非常に長い歴史と格式を持つ大寺院が施設の名称をアルファベットで表記する、あるいは催しの名称に英文を用いるなどの事例も昨今非常に多くなっている。

これらのような事例が頻発しているのは、「観光」による文化破壊ももちろんあろうが、根底にあるのは、日本人自身が日本を見失いつつある、という事実であろう。和食を日本人自身が作らず、または食べなくなり、着物も日常生活では着ず、歴史ある景観や建物が次々と破壊されている。いわばフラットな「ニッポンジン」が生み出されつつある。

その意味で今年の元旦に発生した輪島の地震は象徴的な出来事であった。日本の歴史的産業とその担い手である人々が多数居住する輪島は日本人にとってかけがえのない土地である。しかし、その輪島の復興を「無駄」であるとして切り捨てを是とするような言説が流布した。これは前述した「フラットな」「ニッポンジン」が生み出されつつあることと無関係ではないであろう。

人間はどこまで行っても歴史的な存在である。集団であれ個人であれ、歴史が無ければ存在していく事は不可能である。私たちは今こそ、日本の歴史性に依拠し「日本人」として意志を持って生きていかねばならない。

かつて、戦後日本を代表する批評家・劇作家・翻訳家として活躍した福田恆存は「保守とは横町の蕎麦屋を守ることであり」という言葉を残したとされている。私たちは現代におけるかけがえのない「横町の蕎麦屋」を発見し、それらを守る営為を行わねばならない。そしてその営為は日本だけでなく、世界の発展にも大いに寄与するはずである。

その営為とは具体的には何であろうか。例を挙げるならば地元の神社仏閣に参拝することであり、長い歴史的由緒を持つ種々の工芸品を購入して使うことであり、身近な祭礼や年中行事に参加することであり、武道や芸道と言った「道」を学ぶことであり、おにぎりを握ることである。

普段どのようにして生活するか、この中にこそ本当の意味での思想や哲学の本質がある。この「自啓共創塾」で出会った方々、運営をして下さった「世界のための日本のこころセンター」の方々と連帯をし、本稿で記した営為を強く行っていくことを私は心から希望する。

3. 鈴木大輝

今回の自啓共創塾において、その時々テーマについて学んだり考えさせられることは多々ありましたが、全体を通じて感じたことは対話の重要性です。対話が単なる情報交換の手段ではなく、相互理解を深めるための重要なツールであることを学びました。特に発言者の挙手制(指名制)により、相手の話をしっかりと聞いた後に自分の意見を伝えるという形式が採用されていたことで、相手の意見を尊重しつつ自分の考えを明確に伝えることができました。

日本がこれからの世界・社会に立ち向かうためには、このような対話を通じた相互理解の深化が重要だと感じました。塾においては、相手の話を批判せずに受け入れる姿勢が強調されました。批判的な態度は相手の意見を封じ込め、対話を阻害する原因となります。一方で、相手の話を尊重して理解しようとする姿勢は、信頼関係を築く基盤となります。相手が安心して話せる環境を作ることで、より深い対話が可能となり、相互理解が深まります。これは人間関係だけに留まらず、不安定な国際情勢における国家間の繋がりにおいても重要な役割を果たすと思います。

また異なる背景や価値観を持つ人々が共に生きるためには、対話を通じて相互理解を深めることが不可欠です。多様性と叫ばれる昨今ですが、肉体的・精神的なものだけではなく思考の多様性も認めることにより、社会全体がより豊かで創造的になるのではないのでしょうか。特に環境問題や経済格差など現代社会が直面する課題に対処するためには、異なる立場や意見を調整し、共通の目標に向かって協力することが持続可能な発展のために必要だと感じます。

テーマや話題については、塾生の方々の深い知識には幾度も衝撃を受け感心させられました。特に私自信の背景知識の乏しい歴史や経済の話題については、事前に予習をしたり提供できる話題を準備して臨みました。普段関わらない分野であったり学生時代に丸暗記した内容を改めて深掘りすることで、新たな発見や興味が湧くこともありました。未来を担う若者や子供たちに対しても、学びの楽しさを知ってもらうことで、次世代がより良い社会を築くための基盤を作ることができます。

今回の自啓共創塾で学んだことを日常生活や職場で活かし、多方面への興味関心のアンテナを高くしつつ、より良い対話を心掛けていきたいと思っています。

6. 吉田 達

これまで自分が書いた事前レポート、チャット、ふりかえりの内容を全て読み直してみました。改めて、これまでの考えの見直しを迫る様々な発見があったことを確認する共に、それぞれのテーマが繋がって一つの像を結ぶほどには深めきれていないことも確かで、今後更なる研鑽が必要だと実感しています。

そんな中で、敢えて以下のテーマについて述べるとすると

1. これから先どのような世の中にしたいか。そこに日本のころはどう貢献できると考えるか。

地球上の全ての人々の共通の課題となるのは「これ以上の地球温暖化・生態系破壊の阻止」と「覇権主義に基づく戦争の根絶」でしょう。この課題が「日本のころ」だけ解決し得るとは思えませんが、前者については「自然との共生、環境全体との調和を重んじるころ」が、そして後者については「憲法前文で示された、性善説に基づくころ」が貢献し得ると考えます。

憲法前文より「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」

2. そのために、自分がこれから、または、将来取り組んでみたいこと。

実は先日 Active Book Dialogue® (※) という手法を知り、その対話会を開催するファシリテータの認定も受けました。これまでは企業にお勤めの方を対象にした研修（テーマはマネジメントスキル習得、リーダーシップ開発、イノベティブな組織作り等）を自分の仕事にしていたのですが、これからはここ京都で、市内に住む学生や若い世代の社会人を対象に、今回の塾の参考図書を中心に「日本のころ」に関する理解を深めるための読書会を継続的に開催し、自分の学びも深めていく活動を始めていこうと考えています。

※Active Book Dialogue®

京都在住の竹ノ内壮太郎氏が開発した新しい読書手法。1冊の本を分担して読んでまとめる、発表・共有化する、気づきを深める対話をするというプロセスを通して、著者の伝えようとすることを深く理解でき、能動的な気づきや学びが得られる。

7. 森本悦子

自啓共創塾の扉を開いたのは、幼なじみから勧められたというほんの些細なきっかけでした。

日本の心？武士道？最初は、戸惑いの方が大きく、何をやることのできるのか半信半疑でしたが、一方、年代やバックグラウンドの異なる仲間たちの発言は、借り物ではない真に自分の「ことば」に言語化されていることに衝撃を受け、自分の言語能力の拙さを落胆しつつも、同じレベルで議論に加わりたいという目標設定ができました。

すると、自分なりに問いを立てるようになりました。今、私の周りにはたくさんの「問い」が溢れています。かつては、問いの正解は教科書や専門書の中にありました（と思っていた。）が、今、私の周りには正解がありません。刻々と変化する日々には書き物では追いつかないからでしょう。「問いを立て、向き合い、答えを見つける旅。そんな旅を楽しむこともアリではないか！」、自啓共創塾で学ぶ前と今の心の変化です。

私は、社会の中で豊かに生きていくために必要な力に「コミュニケーション力」と「想像力」を挙げます。自分自身の行動や言動を第三者がどう受けとめるかを想像し、豊かに関わっていくために必要な能力で、数値では標準化されない「生きる力」だと考えるからです。

「自啓共創塾」、自らを啓き、共に創る。「生きるために学ぶ」のではなく、「学ぶために生きる。学ぶことは共に生きること」、相変わらず言語化は不得手ですが、自ら問いを立て、深く熟考し、答えを模索する豊かな

学びと言語能力の伸び代（！）に気づきを得た貴重な経験でした。

事務局の皆様、同期の皆様、ありがとうございました。

8. 井上広淳

明確な夢や目標を持たずにここ 10 年近く生きてきた私であるが、人から尊敬されるような人になりたいという思いはずっと持っている。この自啓共創塾で、そのような人間になるために必要なことは、圧倒的な知識や技術だけではなく、高い人間性だということを再確認することができた。自啓共創塾では、その高い人間性を手に入れるためのきっかけとなりそうなものを大きく分けて 2 つほど学ぶことができたため、それらを紹介する。

1 つ目は、「他者の意見を“対話”を通して柔軟に受け入れ、自分のものにするという姿勢を持ち続けること」である。この塾では、様々な年齢の方々の“対話”を通して、自分の考え方を磨ききっかけを常に与えられていた。これまでの生活では、同年代でかつ似通ったバックボーンを持つ学生と“議論”することが多かった。学生が集団で話すときは、多くが白熱した“議論”となり、お互いの考え方を競わせて答えを求めることが圧倒的に多かった。“議論”は限られた時間の中で答えを一つにまとめないといけない時には必要なことではあるが、他人の意見を柔軟に取り入れて持論を磨き成長させることは難しい。真の目的を見失ってしまうことも少なくない。しかし、この自啓共創塾では、年齢が離れた人が多い環境で、その方々の意見を“対話”を通して楽しく受け入れ、自分の考えにそれを取り込むことができた。自分と異なる考え方に興味を持って、自らそれを精査し、それらを取り入れる過程は元来好きなので、これからは更に意識して続けていこうと思う。

2 つ目は、「一見興味が無さそうで、利益に繋がるように思えないものにこそ目を向けること」である。塾の教材や話題提供の中身は、身近な題材を入り口において、そこに秘められた日本のところを探っていくような構成になっていた。歴史学は中学生になってからあまり深く学んだ記憶がないため、最初は興味が薄かったが、こんなにも面白い世界が待っているとは思わなかった。表面的、短絡的にみたら繋がっていないように見える日本のところが 10 年、20 年の未来の自分の人間性に表れると今では確信している。これは今大学で研究していることにも言えることで、一見業種と研究内容は程遠いもののように見えるが、いつかこの経験が必ず身になると信じ続けている。自分が興味のあるものや生きてきて自然に接してきたものに囚われず、また直近の利益にのみ縛られることなく、方々にアンテナを向けて生きていきたいと思う。

他者の意見を聞き入れて自分のものにするのができて、また自分の専門分野以外への造詣も深い人間になりたい。狭いところに固執し過ぎず、広い視野を持った人間性を手にいれようと意識することでその目標に近づけると考える。

10. 近藤誠司

自啓共創塾での学びは、これまで漠然と興味を持っていた仏教や儒教の世界から、神道、禅、歴史や偉人、マンガや食、言語などの文化、脳と AI に至るまで、日本のところを広く深く考えさせられるリベラルアーツのシャワーであった。話題提供者の鋭い知見と多様なメンバーとのグループでの豊かな対話を通じて、また、五感塾にも参加し、自然と歴史、地域を実際に肌で感じる中で、「日本のところ」を鍵として、社会の様々な側面を広く、より深く探究する機会となった。

この学びを通じて、自分が「知らない」ということに改めて気づかされた。また、「イノベーション一辺倒」

や「株主・金融資本主義」といった現代の価値観には修正が必要だと改めて感じた。現時点での自分なりの「日本のこころ」は、「一つの天を考え、日常で周囲と共有し、実践する」ということではないかと考えている。キリスト教と武士道、仏教や儒教など、それぞれに優れた知の体系があるが、大きな一つの天のもと、各々を習合し、世の中のために利他の心をもって現実に関わりかけることで、日本のみならず、世界の未来を創ることにもつながると信じている。

まだまだこれは現時点の浅い到達点であり、さらに日本のこころを理解し実践するためには、学びが足りないで、今後も学び続けていきたいと思う。読んでみたい本や理解したい知識・考えがまだまだたくさんある。十七条憲法の講義で、神田先生から「本当の和とは自己が成り立ったうえで周りにつきあう」という教えを受けた。自己を確立するために、学び続けたい。

自分が学ぶだけでなく、学びの場に参加することで、自らの感性を高めるとともに、学んだことを実践し、自分の日常の行動に結びつけたいと考えている。そしてゆくゆくは学びを広げることにもチャレンジしたい。日本には寺子屋、藩校、郷村教育、郷中教育など優れた学びの場があり、今も学びに取り組んでいる様々な活動がある。「日本には日本のこころがあり、優れた学びがある」。そのような未来創りに自分なりにどのようなことができるか考え、実践していきたい。

13. 花岡里仲

学べば学ぶほど、日本のこころの奥深さや、応用範囲の余地に興味を湧き続けました。武士道で体現されるような、毅然とした、自分にも他者にも誠実と胸張れる生き方をしていきたいと改めて決心しました。

モノ・コト・ヒトの混沌さを受け入れ、何ならそれらを愛しむ粋さを持ち続けていきたいと思えます。

なお、塾での学びが始まった当初から、心密かに「この場では、自分の考えを安易に収まりよくまとめず、泥臭くもがきながら自分の考えを持ち、伝え、そして周囲の人の考えを聴き続けよう」と決心しておりました。その決意が、自分なりに守り切れたことは誇りに感じております。

今後は、自身の学びとして記憶に留めるだけではなく、普段の仕事や他の活動でもどのように日本のこころを織り込んでいけるかを考え、(中長期であわよくば)その実践する様から、周囲の方々へ気づきをもたらせるような人間になりたいと思えます。

塾生の皆様、事務局の皆様、素晴らしい学びの機会をいただきまして、ありがとうございました。

17. 長岡絢子

私は、これから先の日本において、人の善性を信じられる社会、相互の信頼関係に依拠した関係の成り立つ世の中であってほしいと考えます。

それは互いがすべてを分かりあえなくても断絶せず、存在を根本のところまで否定されない関係で成り立っていける世の中です。

そこで大切なのは、多くの方がより良い個人として生きようとし、人との繋がりの中で何を大事にするか優先するかの共通理解を持つことです。

特に、リーダー層において日本型リベラルアーツを習得することによって「日本のこころ」を体現することが先に述べた世の中を作っていくにあたり不可欠だと考えます。

私は、日本郵政という全国津々浦々に拠点をもち、企業活動を営みながら高い公共性を求められる会社に勤めており、主に本社幹部候補者向けの人材育成の仕事に従事しています。

日本郵政はまさに「公共資本主義」を志向する企業グループといえます。

旧さと新しさが共存する困難の中で、会社の経営を牽引していく人材を育てていくことが求められています。

この国に住む人の幸せに貢献するためには、技術革新、生成 AI の駆使といった最新の専門智の習得ももちろん大切ですが、会社をリードする立場の人間が、統合智として日本の長い歴史の中で蓄積されてきた教養や倫理を身に着けることが必要だと考えます。

私は、今後、人材育成を企画するにあたって、最新の潮流を踏まえつつも、自啓共創塾で学んできた古典や、歴史、先人の知恵を取り入れていく形で「日本のこころ」を持った人材の輩出に幾許か貢献できればと願っています。

そして、私自身も、より良い個人として生きていくための知恵と倫理を追求すべく日本型リベラルアーツを学び続けていきたいです。

18. 小池陽子

1. これまでの学びと気づき

- 日本型リベラルアーツに振れたことでの学びと気づきは、大きく以下3点。
 - ① 物事の表層に捉われず、根底にあるものや原理原則を追求することが肝要
 - ② いわゆる“専門馬鹿”になることなく、関連事項や周辺から紐解かれるところに真実が内在する
 - ③ “歴史は繰り返す”という言葉にある通り、歴史を学ぶことが現在を理解し、未来を見通す力につながる（＝「原点回帰」）

2. 学びや気づき生かした自身の行動

- 有史以来、道具の使い方は前世代から次世代にモラルや注意事項とあわせて伝えてきたものが、インターネットやスマホ、AIなどは次世代が圧倒的な柔軟さで使い方を獲得し、前世代を追い越してしまったことが旧来型の社会性や人間関係の破綻の虞を生んでしまっているように思う。あと10年も経てばこの逆転現象はある程度解消されるのではないかと思いつつも、前世代が敬われるような（＝「薫陶を受けた」と次世代に思ってもらえる）強みが必要で、歴史や思想への深い知見、幅広い事柄への知識を持てるよう、書籍や現地現物からの情報収集を積極的に行いたい。

3. どういう世の中にしたいか

- 話は変わるが、「無能」を作るのは周囲の責任だと思っていて、「お前は能力がない、何もできない」「何でもこの程度のこともできないのか」と責められ続けると、自信を無くして本当に何もできなくなってしまう。翻って、期待をして、任せれば、相応の結果を残し、それが自信となって立ち居振る舞いも変わってくる（＝「立場が人をつくる」）。戦国時代や明治維新の際に、「人物」が多数生まれたのは、前世代が、そして社会が若い世代に大きな期待を寄せ、思い切った権限を持たせたからではなかろうか。
- 今の日本、とくに大企業や役所、歴史のある業界を見ていると、バブルを謳歌し、その崩壊後、経済的・社会的に再構築されていく中で、30代前半で大きなチャンスをつかんだ50代が未だに第一線で活躍し、若手にその能力を超えるような困難な仕事へ挑戦させたり、大胆な権限移譲によって腹をくくらせるような経験を提供したりといったことがなくなってきた（昔は課長代理が一番忙しく、組織の取り回しをしていたのが、少し前は課長がそうなり、今は部長がその役目を担っている）。反面、「若手が育たない」と嘆いているが、それは若手の責任なのか、若手に期待せず任せない上司側の問題なのかというと、結局、自分が責任を取らなければならない中で、若手に任せる度量を失い、かつ、自分が楽しい仕事で輝き続け

ることを選んでいる上司側の“罪”ではなからうか。

- 「昔は良かった」と回顧するだけではなく、「これからの日本や若者が心配」と嘆くのではなく、ちゃんと良いところを見て、期待して、責任ある仕事を任せることで、次世代が楽しそうに、輝いて生きている日本となることが理想である。

19. 大塚翔太

(課題意識)

行政に籍を置く身として、経済成長が鈍化し、社会問題が山積する中では、これまでのような「行政が施策を考え、住民がそれを受け取る」という形態には限界が来ていると感ずることがあります。

理想主義かもしれませんが、数々の困難がある中では、住民と行政が一緒になって、長期的視点に立って我々が住む地域の将来像(理想像)を考える必要があります、それが本来あるべき行政の姿ではないかと感じていました。

そのための第一歩としては、住民が自分たちの意見が反映(尊重)されていると感ずることが重要ですが、一方で行政としては公益性も十分に考慮する必要があります。行政と住民の対話は、最初は立場や主張のぶつかり合いが発生し、労力の大きい作業になるかもしれず、そのリスクがいわゆる住民対話と呼ばれるものが敬遠されがちな原因ではないかと思ひます。

(自啓共創塾を通して)

しかし、自啓共創塾を通じて、それを乗り越える力(=日本のこころ)を我々は無意識のうちに受け継いでいると感ずました。異なる意見を持つ相手を打ち負かすのではなく、異なる意見も否定せず包含する姿勢や、利他の姿勢を持つ我々は、本来は立場や意見を超えて集団で何かを作り上げることに長けているはずでず。

加えて、神仏儒の習合に見られるように、我々は新しいものを受け入れる寛容性を有し、受け入れたものを習合し、必要に応じてローカライズ(和魂漢才化、和魂洋才化)する形で取り入れ、その時々々の困難を乗り越えてきた歴史があります。

一般的に行政は内向きになりがちであり、課題への対応(施策)についても定型的になる傾向がありますが、(自啓共創塾のように)異なるバックグラウンドを持つ人間(住民)が集まることで、思わぬ課題や思わぬ解決の糸口が見つかる可能性もあるかと思ひます。現在のような困難な時にこそ、日本のこころが力を発揮できるのではないかと感ずます。

(特に将来を見据えた議論を行う際には、将来の受益者となる若年層に参加してもらうなど、世代を問わない対話が必要です。そのような場は日本型リベラルアーツにも通じるものがあり、次世代の育成にもつながるのではないかと思ひます。)

このように、日本のこころをベースにして住民対話の取組みを始めさえすれば、行政と住民との関係は時を経るごとに洗練されていき、労力も少なくなる一方、課題解決力の向上や将来に希望が持てる社会につながっていくものと思ひ、今後、小さな取組みからでも始めていきたいと思ひます。

このように、新たな行政の在り方に多くの示唆がある研修でした。ありがとうございました。

20. 中村純子

今、地方は切り捨てられようとして感ずる。少子高齢化が進み人口も減って、経済も縮小していく中、そんな不便で人の少ないところに回すお金の余裕はない、というわけだ。その象徴的な例が能登半島だ。財務

省は「維持管理コストを念頭において復興を」と提言した。地方の切り捨て、コスト削減ありきがにじむこの姿勢は、同じ半島である我が和歌山県にとって、とても人ごととは思えない。

不景気な話が多いなか、元気いっぱいなのが観光だ。コロナが明け、安価で治安のよい日本に続々と外国人観光客がやってくる。一般庶民には到底手の届かないような価格のサービスが提供され、バブルさながらのインバウンド景気だ。住民の暮らしが成り立たないほどに観光客が集中する地域もある。経済成長のためにはインバウンドだ、とどこの地方も呼び込みに躍起になっている。しかし、住んでいる人よりも観光客の数の方が多いその土地は、果たして日本の観光地なのだろうか。欲望だけに引きずられ、大事なものを見失ってはいないか。日本の風土と自然との調和のなかで生まれてきた「日本のこころ」は、本質的に大事なものは何かを考えるにあたっての指針になると思っている。

観光は「光を観る」と書く。もともとは、その国の人々の暮らしを観察し、それを持って統治者を国賓として遇するに値するかを見極める、というのが原義だそう。 「光」とは、地域の自然、文化、人の暮らしの営みそのものではないか。地域で豊かに人々が暮らしているからこそ、自然や文化が守られているのであり、各地に人の息づかいがきらきらと輝いているからこそ、世界中の人々を惹きつける魅力になる。行き過ぎた都市への一極集中のベクトルを逆に向け、地方の誇りを取り戻すために「観光」を再定義していきたいと考えている。

21. 松山亜弥

古の知恵が照らす未来への道

目を閉じて、未来の世界を想像してみる。

そこでは、人々がそれぞれの花を咲かせている。どんな花も美しく、比べられることはない。成功も失敗も、すべてはその花を彩る個性。誰もが自分の可能性を信じ、自分らしく生きている。そんな世界を、私は夢見ている。でも、そのためには、どうしたらいいのか？

私たちは、もっと五感を研ぎ澄まし、世界を多角的に見る、それが大切になってくると思うのです。まるで、一枚の絵を見るように、全体を捉え、細部にも目を凝らす。そして、時には視点を変え、新しい発見を楽しむ。AIが進化する時代だからこそ、『人間らしさ』を見つめ直す必要があります。心の奥底にある温かさ、優しさ、思いやり。言葉では言い表せない、人と人との繋がり。これらは、古くから日本人が大切にしてきた価値観であり、心のあり方。長い歴史の中で、日本人は自然と調和し、互いに助け合い、感謝の気持ちを忘れずに生きてきた。それは、まるで、美しい *tapestry* のように、生活の中に織り込まれている。

今こそ、先人たちの知恵を再認識する時だと感じる。そして、その知恵を、世界中の人々と分かち合う、そんな時が来ている気配をここ何年か感じている。押し付けるのではなく、語りかけるように。

「人は、もっと優しくなれる。もっと強く、そして美しくなれる」と。

そのためには、まず私たち日本人が、自分たちの文化が持つ美しさとしなやかさに気づくことが大切。そして、その心を世界に発信しながら、日々の生活の中で体現していく。現在生業としている研修や講演会、そして、書物という機会も十二分に活用して伝えていきたい。それは、小さな灯火かもしれない。でも、その灯火が、いつか世界を照らす大きな光になる可能性を持っている。

私がこれから取り組むこと

日本人が自信を取り戻せるよう、日本の文化や心の在り方について、わかりやすく伝えていく。

研修や講演会、書物を通して、心のこもったメッセージを発信していく。

日本の知恵を世界に共有するため、英語での発信にも力を入れていく。

この物語が、世界の人の心に響き、未来への希望を感じて生きていく人が増えたら嬉しい。

22. 虻川大

世界のため、日本のこころ — 今の自分が思うこと —

セミナーを通じて「世界のため日本のこころ」というテーマを考える機会を得ました。日本のこころ」と聞いて、私はまず「和」の精神を思い浮かべます。それは自然との調和や他者を思いやる姿勢、そして調和を大切にする価値観です。これらは日本の伝統や文化に根付いており、現在も私たちの生活や考え方の中に息づいています。一方で、現代社会の中ではこれらの価値観が形骸化しつつある側面もあると感じています。

しかし、私は「日本のこころ」は変化を受け入れる柔軟性も持ち合わせていると考えます。例えば、アニメや食文化、あるいは日本の工芸品が海外で愛されているように、古い伝統だけでなく新しい形で「日本らしさ」が広がっているのを感じます。こうした「進化する日本のこころ」は、私たちがこれから世界と向き合っていく上で重要な役割を果たすのではないかと思います。

セミナーを通じて議論された「日本が世界に何を伝えられるか」というテーマについて、私が考える答えは、「細部へのこだわり」と「他者を尊重する姿勢」です。日本人は仕事においても日常生活においても、小さな部分まで配慮し、相手を思いやる態度を自然と持っています。これが世界で日本が信頼される理由の一つだと感じます。ただし、これらの美德が行き過ぎると、「完璧主義」や「周囲に合わせすぎる文化」といった課題を生むこともあります。だからこそ、相手の価値観を受け入れる柔軟性を持ちながら、自分たちの強みを活かしていくことが重要だと考えます。

私たち一人ひとりが「日本のこころ」を意識し、それを日々の行動の中で表現することが、結果として世界に良い影響を与えるのではないのでしょうか。例えば、普段の生活の中で「感謝」を言葉にして伝えたり、環境への配慮を心掛けたりすることは小さなことですが、それ自体が「日本のこころ」を体現する行動になると思います。

セミナーを通して感じたことは、「日本のこころ」は固定的なものではなく、常に変化しながら受け継がれるものであるということです。私自身も、自分がどのような形でそれを体現し、世界に発信できるかを考えながら行動していきたいと思います。

23. 横山 邦紹

—日本のこころで挑む調和と倫理観で築く持続可能な未来—

現代社会は、地球温暖化、資本主義の課題、グローバル化の影響など、多くの危機的な課題を抱えています。これに立ち向かうために、日本の「和の精神」と深い倫理観が果たす役割は大きいと考えます。本塾での学びを通じ、日本の歴史や文化から得た教訓が、未来社会の構築にどう活かせるかを深く考えました。

これから先、私が目指す社会は、**失敗を恐れず挑戦できる寛容な社会**です。振り返りの中で、社会や組織が「失敗を避ける文化」に縛られている現状を痛感しました。たとえば、上司が部下に失敗させないために過干渉する職場環境や、親が子どもにルールを敷いてしまう家庭環境が挑戦の芽を摘んでいます。日本の「和の精神」は、他者と協調しつつ、失敗を成長の一環として受け入れる力を育む土壌となります。この精神を基盤に、「挑戦を学びと変える文化」を社会に浸透させることが、日本のこころが果たすべき役割だと考えます。

また、AIやテクノロジーが急速に進化する現代において、倫理観の重要性が増しています。AIは無数の可能性を持つ一方で、倫理的な配慮が欠ければ社会を分断するツールにもなり得ます。本塾で学んだ「技術は人

間のツールであり、人間がそれに使われるべきではない」という戒めは、現代の技術活用において重要な指針です。日本の「見えざるものが見えるものを動かす」という哲学的な考え方は、テクノロジーと人間性の調和を目指す上で欠かせません。

これらの課題に対応するために、私は二つの取り組みを行いたいと考えています。一つ目は、教育を通じた挑戦の価値の普及です。特に、学校や職場で「失敗から学ぶ」をテーマとしたワークショップを開催し、挑戦を恐れない人材を育成することを目指します。二つ目は、持続可能な経済モデルの構築です。日本の「足るを知る」精神を基盤に、エシカル消費や地元産業の活性化を促す活動に取り組みたいと考えています。たとえば、伝統工芸品とデジタル技術の融合による地域経済の活性化は、環境保護と文化継承の両立を図る可能性を秘めています。また、社会貢献活動として取り組んでいる語り部の経験を活かし、戦争の歴史やその背景を広めることで、平和意識を醸成する活動も継続していきたいと考えています。

未来を見据え、日本のところが持つ価値を再確認し、挑戦と倫理が尊重される社会を築くことが、私たちの果たすべき使命です。私はこの学びを基に、自ら行動を起こし、持続可能で調和の取れた社会の実現に貢献したいと考えています。

24. 藤谷仁美

これまで『日本のこころ』を学んできた中で、ご著書に示された15の視点をもとに「融合」と「習合」の歴史や事象を振り返ると、過去から現在に至るまで、異なるものを排除するのではなく、取り入れ、認め、共存させる力が日本文化の根底に流れていることがわかります。“極”に思えるものや、光と闇のように対立するものさえも習合、融合させる精神を持っていたからこそ、これまで成し遂げられてきたことがあるのだと感じました。

特に、第九章に記されていた以下の言葉に触れたとき、私が日本や日本文化に惹かれるポイントが言語化されており（個と全体の関係性を重視する、呼吸と一体化した身体的活動を重んじる、人間は自然の一部である、熟成、用の美、間、立場の尊重、見えないところへのこだわり、気を合わせる、道（精神的プロセス）など）その学びを通じて『日本のこころ』と自分自身のつながりを強く感じ、“ある”という希望（自分が生まれ育ったこの国の素晴らしさ）とともに“誇り”と感謝の気持ちが湧き上がってきました。

VUCA（不安定、予測困難、複雑、多様）な時代、柔軟性と適応力が求められる今、この『日本のこころ』の学びに込められた、過去の人々から受け継がれてきた叡智は、現代に生きる私たちにとっても非常に重要であり、未来へと繋がる力を持っていると確信しています。これからは、単なる画一化や標準化を目指すグローバルイズムではなく、世界や日本、そして人々や文化の違いを認め尊重し合い、共栄していく、そのための出発点として、『日本のこころ』に触れ、理解を深めた人々が、よさを感じ、自分の中にもその精神が流れていることに気づき、そのことで一人ひとりが生きることに誇りを持つ、互いを認め合う社会、世界が広がることを願っています。

その実現のために、身体性、感性、直観、人間力を育む『日本型リベラルアーツ』を多角的に普及させることに貢献したいと考えています。私が関心を持つ、教育、地域活性、旅、食、自然、伝統、文化、健康…これらと『日本のこころ』が融合し、様々な世代が共にプロジェクトを考え、アクションを起こすことで、次世代が自らの手でその精神を今度は未来へ繋げてくれますように。私自身もその循環の源となれたら嬉しく、次世代にバトンを渡していく役目を担いたいと思っています。

25. 名倉大輔

□神・仏・儒の習合を「禪」から学ぶ

私はこの塾で初めて「神・仏・儒の習合」という概念に出会いました。それまでは、神道・仏教・儒教といった宗教が、それぞれ独立して存在していると何となく考えていました。それぞれが教義を持ち、信者や活動がある一方で、どこか自分には縁遠いものだと感じていました。

しかし、塾での学びを通じて、神・仏・儒が習合しているという日本独特の考え方に触れることができました。この習合は、矛盾するものを優劣なく受け入れ、調和を図るという「日本のこころ」の象徴だと言えます。それは、日本人が古代から持つ潜在的な能力であり、私自身にも宿るものではないかと気づいたとき、大きな喜びを感じました。

宗教という狭い枠組みにとらわれず、「日本のこころ」を持つことに誇りを抱きました。この心は、神の国・自然の国としての日本に生まれた私たちが、多様性を受け入れ、変化に柔軟に対応する精神的な基盤を築く力を持っていることを示していると考えます。そして、私はこの気づきを大切に、精神の基盤をさらに強くしようと決意しました。

その第一歩として、「禪」についての学びを深めます。単なる知識としてではなく、例えば禅道場での実践などを通じて、目の前の課題に真摯に向き合う経験を重ねたいと考えています。禪を通じて得られる小さな叡智のひらめきや感受性の豊かさを、日々の行動に活かしていきたいと思います。さらに、身近な人々の立場を思いやり、行動することを心がけ、一人の人間として視座を高めながら、組織や地域社会の発展に貢献する行動を続けていきます。

具体的な行動についてはまだ模索中ですが、まずは現職において自分の役割を全うし、従業員一人ひとりが働きがいや誇りを持てる職場環境を創出することを目指します。そして、地域社会や次世代の子どもたちに対しても、積極的に行動を起こせる人間になりたいと考えています。

最後に、この貴重な学びの場を提供してくださった事務局の皆さま、講師の方々、そしてダイアログを通じて意見を交わしてくださった塾生の皆さまに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

27. 三橋知子

先日、『小学校～それは小さな社会～』という映画をみました。イギリスと日本に由来を持つ監督が自分らしさとは何かを考えていくうちに、自身が日本で過ごした小学校時代に学んだ「規律と責任」に由来することに気づき、現在の公立小学校を取材したドキュメンタリー映画なのですが、それをみながら日本人“に”どのようになってゆくのかについて非常に考えさせられました。日本の教育の特色は「生活も教育の対象」ということで、掃除、給食、と生活に関係することも自ら行わせ教育に内包するのは世界でも珍しいようです。そして、「社会と個人の関係の中でわたしがどうあるべきか判断することを学ぶ場所」として小学校が描かれていました。集団性の強さや協調性の高さが日本の特色である一方、諸刃の剣であり、いじめのもとにもなりうるとのこと。間（あいだ）に囚われすぎると思考停止に陥りかねない。関係性や間を重視する国民性についてはこの塾でも学んできたことでありますが、その感性を私自身はこれからも大切にしていきたいと思います。思考しながら試行錯誤し間を創りあげていく、そんな未来にむかうためには異世代での対話や、そもそもそんな小難しいことを言わず同じ場で時を共にし、共に在ることが大切なのではないかと。改めて、場を整えること、食事を調えることから始めてみようと考えています。

30. 伊藤麻耶子

歴史を振り返るとさまざまな発明、発見により生活は便利になり、戦争は全くなくなっていないが、平和な世の中になってきた。差別問題はまだまだあるが、人々はそのことに意識を向け始め、多くの会社でも DEI に取り組んでいる。この世の中はこれからどのような方向に向かっていくのかという問いを立てたとき、今まで歩んできた道を振り返っても、必ず良い方向に向かっていくと信じている。便利な世の中になったのにさらに忙しくなったと言う議論もあるが、さまざまなことが効率化され、交通機関の発達により移動も簡単になって、世界も広がり、選択も増えた。解決すべき問題はこれからも常にあるであろうが、今までも人間は常に解決策を見つけてきた。それら全てに通じこれからも大切になるのは教育だ。どのような教育を受けるかで人間は大きく変わると思う。私自身、今回のこの塾をきっかけに本に引用された様々な本を読み、日本のことを学び、誇りに思える国だとさらに思えるようになった。また広く視野を持ち日本だけにこだわらず、世界を見て日本を見ると言う姿勢が大切だと思った。一方、ブータンの幸福度が下がったのは情報鎖国が解かれ、他国と比べるようになったからと言われている。世界が広がるとう言う心理も働くのかということもあるが、やはり、世の中の発展には教育が必須であると思う。

日本の教育や文化を見たときにコインの裏表があるように例えば一つの習性にも良い面と悪い面がある。日本の幸福度が低いのは、他人と比べてがる文化があるからでもあろう。普通が良い、また他人の目を気にしすぎるところは行動の妨げになるように思う。他人を第一に考えると言うのは良いことであるように聞こえるが、まずは自分を大切に、他人のことを気にしすぎて自分の信じることができなければ元も子もない。一人一人が自分の信念に従って行動をすれば、世の中は良い方向に進むと信じている。

さてどのような世の中にしたいか。戦争がなく、皆が幸せに感じる世の中になればよい。先にコインの裏表の話述べたが、日本人は自分のみの利益を考えず全体最適を目指すことだと思うが、この日本の心は平和な世の中に導く力があると思う。

自分自身においてはこれからも引き続き多くの書物に触れ歴史を学んでいきたい。現在勤務している会社では既に取り組んでいるが、DEI の考えを広げること。会社を離れたとしても何らかの形で続けたい。また今も携わっているアフリカ支援の活動、一アフリカの方が日本のシステムをコピーしたいと言っていたので、何らかの形で助けたい。また U 理論 (MIT のオットーシャーマンの提唱した理論) を広める NPO に携わっているが、そこで学んでいることとこちらの塾で教わったことに共通項があると思えるので、何らかの形で共創できればさらに何か生まれるかもしれないというぼんやりとした考えも浮かんできた。会社では塾でのダイアログの方式を取り入れて、様々な Background のグループを作り 2 回ほどセッションを開き、好評であった。引き続きこちらで学んだ経験を活かして次の活動・学びに繋げていきたいと思っている。

31. 薄羽美江

2021 年 10 月 26 日、岸田前総理大臣時代、総理大臣官邸において新しい資本主義第一回会議が開催されたことを思い返しております。以来、日本の「新しい資本主義」のビジョンとその具体化について「成長と分配の好循環」と「コロナ後の新しい社会の開拓」をコンセプトに会議が重ねられました。果たして、現代、日本の資本とは何を指し、どのような可能性を未来に拓くものでしょうか？かつて、宮沢賢治が『農業芸術概論』で、大自然の懐にあって「直観」と「情緒」を育み、日々の営みを真・善・美にまで高め、風とゆきしし雲からエネルギーを取れと詠みました。その、美しくしなやかなヴィジョンが掲揚されたように、新たな日本の歩みのこれからの可能性について、私たち市井の民も共に議論を重ねたいと願うものです。自啓共創塾において、

日本のこころを核にして共に語り合えた幸いなる学びを通じて、次のような「日本の夢が実現する未来」を、最終レポートとして述べさせていただきたく存じます。

日本の未来。私たちの国土に広がる山野には樹木や草花が豊かで、保全が行き届き、大地には瑞穂がたおやかに風光にそよいでいます。そのふくよかなる地表を満たしていく湧水や溪流は美しく澄み清まり、四方大海へ勢い増して流れがそそいでゆくのです。

日本の未来。私たちの母国を支える食卓には、安心と安全が確かで、管理が行き渡り、心身には栄養がすこやかに活力をもたらしています。その豊かなる市場を満たしていく農産物や水産物は正しく守り生まれ、国内外へと誉れ高く美味しさがひろがってゆくのです。

日本の未来。私たちの生活が営まれる社会には、理念や哲学が詳らかで、配慮が行き交い、国政には市民がこまやかに対話を生み出しています。そのしなやかなる叡智を満たしてゆく知識や経験は善く磨き研がれ、自他互惠へと慈悲深く幸せがつながりあってゆくのです。

そして、私たちは、明日の夢や希望を抱くことができます。目を輝かせながら、未来を語り合っています。そして、こうして日々をつつがなく過ごすことができる毎日の生活に感謝を捧げ、「ああ、ほんとうに生きていてよかった」と、自らの生命力を高めゆくのです。

こうして、国民一人ひとり、過去からの歴史とその叡智に学び、今を常に真摯に見つめ、未来に持続可能な、真に豊かで平和な社会を継承する賢慮を研ぎ磨きます。日本という国家の五穀豊穰と精神の倫理道徳とを守り抜く、次世代への愛情に満ちた教育を見失うことはありません。

それはまた、日本にとどまることがないものです。

私たちはどこからきて、私たちはどこにいるのか。そしてどこへいくのか。

広大無辺なる漆黒の宇宙空間に、大気と水をたたえて青く輝く奇跡の星、地球。私たち人類がそう呼ぶ、この星に住まう人類の一員として、私たちは地球上の世界各国と共につながりあっているのです。*

33. 渋谷友理香

日本の良さ、日本のこころの良さをもっと世界に広めていきたい。

それぞれの国が、自国の文化を大切にしながら共存できる世界にしたい。

自啓共創塾に参加し、日本の文化や歴史について改めて考えることで、学生時代とは異なる観点で日本の良さを学ぶことができた。近年、グローバル人材の育成を掲げている企業や学校が多いが、海外に目を向ける前に、まずは正しい日本語を使い、日本についてよく理解することが、国際社会で活躍できる第一歩だと考える。そのために、以下の点を大切に今後行動していきたい。

① 心の優しさ、謙虚さ

日本人の意見は曖昧であり、グレーゾーンが多いと海外の方からは思われている。しかしそれは、白黒をはっきりさせないという日本人の優しさであり、相手に理解を示し歩み寄る寛容さがあるからであると学んだ。日本人の心の優しさ、謙虚さを大事にして行動していきたい。

② 個々の文化や言語を尊重した「国際化」

ルールや制度を共通化し「グローバル化」することは、物事を推進する上位者にとっては都合の良いことであるが、各国の伝統や文化は薄れてしまう。各国の伝統や文化を尊重し、お互いの違いを認めつつ交流できる世界にしていきたい。最近、英語をそのまま取り入れたカタカナ語が増加しているが、きちんと日本語訳をし、日本語の意味を正しく理解することが大切だと学んだ。個々の文化や言語を尊重した「国際化」を推進するた

めに、まずは自国の文化や言語と向き合っていきたい。

日本とはどのような国なのかを理解するためには、他国の文化も理解する必要がある。相手を知ることで違いに気づき、自分を知ることができる。日本がすごいと思えば他国を下げるのではなく、文化的背景、各国の善悪の基準も理解して歩み寄ることができる人を増やしていきたい。

最後に、自啓共創塾において、幅広い年代かつ様々な職種の方と会話できたことは、とても貴重な経験となった。自分の意見を伝えることはあまり得意ではないが、本塾に参加したことで、自分なりに感じたこと、考えたことを整理し発信することに抵抗を感じるものが少なくなった。このような貴重な機会をいただけたことに、心より感謝申し上げる。

34. 大桃綾子

自啓共創塾での学びを通して、最も印象に残ったことは、日本のところは想像していた以上に自分の中にあったということ、そして日本のところの存在を自分自身が言語化・認識出来ていなかった、ということです。

まず日本のところが自分の中にあった、という点については、嬉しく思いました。例えば、私はいつ死んでもいいと思って生きていますが、この背景には武士道の考え方があったこと。新入社員時代に現場を見ろと言われて続けたことは、陽明学の知行合一に通ずること。自分が大切にしてきたものの背景が繋がり、理解度が一段上がったと思いますし、日本で育ったことへの感謝の気持ちがより強くなりました。

グローバル化（地球化）が進むこれからの世界・社会において、自然の中に自らを内包して捉える日本のところが、争いから共存へ、よりよい社会へと向かう貢献ができると強く感じています。そのためには、無意識での日本のところの体現だけでなく、日本のところを知り、自らの言葉で語り、伝えることが必要です。

私は50代の方が、セカンドキャリアを考え実践する越境学習の事業を5年前に立ち上げました。50代の方が、それまで考えたこともなかった、その先の人生についてビジョンを言語化され、軽やかに次の活動を始めていかれる姿にはいつも胸を打たれます。こうしたビジョンは、ご自身は無意識ではあるものの、日本のところと密接に関わっていることも、自啓共創塾での学びを通じて気づくことが出来ました。

日本は働く人の約6割が45歳以上、更に人口が減少する社会を迎えています。これからも50代の皆さんの人生ビジョンの言語化を後押しし、更には日本のところとの繋がりを認識いただける機会としても進化させていくことで、日本のところが言語化され、伝えられることで、よりよい世界へ貢献していけるように、微力ながら努めていきたいと思えます。

《伴走者レポート》

事務局 松本亮太

塾生の皆様、卒塾おめでとうございます。日本のところを学ぶ自啓共創塾へは事務局の一員として参加させて頂きました。毎回塾生お一人お一人の言葉にハッとした気付きがあります。天台宗の摩訶止観にある根本法理に「一念三千」があります。人の瞬間瞬間の心に全宇宙の事象が具わること。転じて心の持ち方（一念）により世界が変わることです。自啓共創塾で得た日本のところへの気付きから、卒塾生の皆様が新しい世界を切り拓く原動力となれば事務局として嬉しく思えます。

事務局 柏木満美

第4期は開始前のオリエンテーションの時から活発に交流する姿がみられ、これまでと何か違う印象がありました。8ヶ月の間には取り巻く環境の変化などにより塾への参加が難しくなってしまった塾生もいらっしゃいましたが、共に学び続けてくださった皆様からは様々な話題についてご自身の経験や取り組みから感じることを積極的にお話いただき、幾度となく「なるほど～」と深く頷いたりメモしたりと私自身も学びの大きい期間となりました。終わりのない学びをこれからも続けてまいります。第4期の皆様には卒塾生としてこれからもご縁を頂きたくよろしくお願ひいたします。

塾頭 岩崎 隆

自啓共創塾4期生の皆さま、ご卒塾誠にありがとうございます。

グループ討議中に皆様お話を聞かせて頂き、私自身の良き学びとなりました。本当にありがとうございます。普段の私は、一方的に自分の想いを発言してばかりなのですが、この塾でオブザーバーをさせて頂き、なるほど、人の考え方を聴くことって自身の想いをまとめる上でとても役立つなあと感じておりました。皆さんのおかげです！

自啓共創塾のOBとして、今後もこの塾活動に関わっていきたいと考えております。社会で、現役で活躍する若い皆様との交流はとても刺激的です。是非4期卒塾生の皆さんも一緒に日本の未来を創る自啓共創塾を共に盛り上げていきましょう。一見小さな一歩に見える自身の行動が、将来大きなうねりとなって日本再生につながり、世界のための日本のこころを育むものと信じます。Make Japan Great Again！

塾頭 富田直子

皆様、卒塾おめでとうございます。毎回オブザーブ参加でしたが、皆様の対話に、何度混ざりたいと思ったことか！ 私も、皆様の発言から大いに学びながら、二年前に自分でした卒塾発表（当時の私は、「日本は、その霊性をもってして今後、世界中の人が、本来の自分に立ち返るためのリトリートの場になりうる。私もその一端を担う”場”をつくりたい」と発表しました）の内容を反芻し、前に進む力をいただけてきました。

ちなみに、最終回の講義、皆様は生成AIでしたが、私のときはメタバースでした。たった2年でテーマが変わり、AIは劇的進化を遂げ、ますます本質的な「在り方」の部分が問われる時代になったと感じています。そこを磨くためにも、これからもなお一層、対話を重ねていきたい。世界のための日本のこころに、よりよき未来を共につくる可能性を見出ししていきたい。これから私たちは卒塾生どうし。やっとなオブザーブではなく、一緒に話せます！ 今後はますます、どうぞよろしくお願ひいたします！

塾頭 栗原康剛

第4期も塾生の皆さんとともに大いに学ばせて頂きました。リベラルアーツの学びに完成はありません。私自身、常に未熟さを感じていますが、同時に“リベラルアーツの社会実装”に取り組んでいます。当塾での学びも活かしながら、今年伊豆・伊東を舞台に「地域に学ぶリベラルアーツの塾」を立ち上げました。当塾の関係者にもご参加・ご協力を頂いています。4回の試行を経ることによる学びもあり、今後地域を広げた発展的な展開を構想しています。「幸せと資本主義のあいだ」を探索しながら、リベラルアーツ資源を発掘・再発見し、共学と共創を往來する“リベラルアーツ生態系”を創出できないかと考えています。

公とは何か、国際化とグローバル化、知性・感性・身体性・非認知能力の弱体化、ダイバーシティと宗教、日本化と習合、人格形成、そしてリベラルアーツとは何か等、第4期のグループ対話で問題提起された論点を

引き継ぐところも少なくありません。ご関心のある方がいらっしゃいましたら、どうぞお声がけください！

“リベラルアーツの社会実装”に取り組む中で、昨今リベラルアーツに対する関心の高まりを強く感じます。時代の要請でしょう。特に米国型の株主資本主義に対する違和感が背景にあるように思います。当塾で学んだ皆さんが様々にご活躍される地合いにあります。当塾の運営や卒塾生ネットワークを含め色々な形でお付き合い頂ければ幸いです。今後とも宜しく願い申し上げます。

塾頭 根本英明

皆さま、卒塾おめでとうございます。私はほぼ毎回、グループ対話のオブザーバーを担当させていただきましたが、その都度、対話の中で交わされる発言の鋭さ、洞察力、多角的な視点の捉え方に感嘆しきりでした。さらに終了後のふりかえりで話題提供者に毎回、質問が寄せられたことは、これまでないことでした。そんなことで今期はとくに探求心の強い方が多かった印象を持ちました。

塾では最後に「これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）」を提出いただき、最終発表会での発表を以て卒塾となります。ですが、本当に大切なことはこれからです。書いて発表して終わりではなく、ぜひ皆さんの立てた志を実践してください。

塾の期間中はオンライン中心のため、なかなか深い人間関係を築きにくかったかもしれません。しかし修了後は、この塾で共に学んだ仲間がリアルの場で交流する集いがあります。これは私たちにとって貴重な財産だと思います。

次はぜひ卒塾生総会に参加していただき、期を超えた卒塾生たちと交流する中で同志を見つけ、つながっていただければと思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

塾長 井上淳也

第4期の皆さまと共にとっても有意義な学びの時間を共有できたことに感謝します。

世界はますます分断し、争いや争いは止むことがありません。日本被団協のノーベル平和賞受賞は、そうした危機的な状況を変え、平和な世界を構築しようとの強い願いの表れです。そう思っている人も大勢いるのだということを感じます。

日本のこころの源流にあるのは和の精神であり、人類の平和、自然との調和を志向していますが、そうした日本であってさえ生存が脅かされると激しい戦争に突入してしまうという歴史があります。それぐらい平和の維持は難しいのだと気づかされます。しかし希望はあります。インドを源流とする東洋思想とギリシャを源流とする西洋思想と日本のこころの原点は共通しているのだと、私自身学ぶにつれだんだんとわかってきました。人間は原点に返ればみな同じだということですね。

私も皆さまとのご縁を大切に、これらもともに学び、行動していきたいと願っています。

事務局 土居征夫

日本のこころの本質について、自身の経験と塾での多様な対話を通じて考えたことを一言でいえば、「有心のこころと無心のこころの両面性の自覚」ということで、とくに「無心のこころが基本であるべき」という実感です。有心のこころとは、自他が分立する現実世界の人間のこころであり、知識と論理（認知能力）が優位となります。一方で無心のこころとは、自他の差別が消える無意識世界の人間のこころであり、情緒・感性・直観・人間性（非認知能力）が優位となります。両者は、知力と徳力と言い換えることもできます。戦争と犯罪

が横行する最近の暗い世相の背景には、世界中の指導層が、自他の競い合いのために知力＝有心のころを優位に働かせる一方で、徳力＝無心のころを見失ってきたという事情があると思います。日本では戦後とくにこの傾向が著しく進み、かつて備わっていた祖先の素晴らしい無心のころの働きが忘れられてしまったように思います。日本の危機でもありますが、これに気づくことで日本の未来への再生は急速に進むと期待しています。